

## 森杲氏の書評に答えて

木下 順\*

### 1

1988年の夏のことでした。荒又重雄、平尾武久、森杲の諸先生とともに、私は札幌大学の会議室で『雇用官僚制』翻訳の最後の詰めの作業に参加していました。訳語はもちろん文体にまで立ち入って、朝から長い時間をかけて検討していたのです。ふと目をやると、窓の向こうに野幌森林公園の開拓百年記念塔が小さくかすんでいました。その翌日、私は朝からコンピュータを借りて担当部分を訂正しました。午後遅くまでかかる根を詰めた作業が終わった頃、森さんが来られて、森林公園に車で連れて行ってくださいました。開拓記念館はもう閉まっていた、林のあいだを散策したように記憶しています。

この絶好の機会をとらえて、私は身の上相談をしました。その翌年の秋から海外留学の権利が発生するので、どこに行くか決めなければならなかったのです。大きくわけて二つの候補地がありました。ひとつは西南部の大学で、スペイン語も勉強しながら、メキシコ系移民の労働史を手がけること。この場合には『雇用官僚制』

の著者であるUCLAのジャコビーさんに受け入れを頼もうと思っていました。もうひとつの選択肢は東部の大学でした。

二人で記念塔の裾にあるベンチに腰をかけました。森さんは、ニューイングランドにいた「メカニック」という魅力的な人たちの話をしてくださいました。今から思えば、『アメリカ職人の仕事史<sup>1)</sup>』に結実するプロジェクトへの熱い思いを語ってくださったのではないのでしょうか。どんな内容だったかはもうすっかり忘れてしまったのですが、それを語る森さんの伝道師のような情熱が心にしみ入ったことを覚えています。

結局私は、修士論文<sup>2)</sup>以来の、徒弟制を中心とする技能養成をめぐる労働史を研究テーマとして、イェール大学のデイビッド・モンゴメリー教授のところに行きました。博士論文もふくめて直接の先行研究がなかったので、一次史料を集めることに全力を注ぎました。その研究成果を、留学からほぼ十年後に『アメリカ技能養成と労資関係』に取りまとめました。これを以下では「拙著」と呼びます。

### 2

札幌郊外で身の上相談に乗っていただいてか

\*木下 順 (Jun KINOSHITA)：国学院大学経済学部教授。大阪市立大学大学院経済学研究科博士課程修了。『アメリカ技能養成と労資関係——メカニックからマンパワーへ』（ミネルヴァ書房、2000年）；「人的能力開発政策の起源」『（国学院大学経済学研究科）経済学研究』第30輯、1999年3月；「日本社会政策史の探求（上）——地方改良、修養団、協同会」『国学院経済学』第44巻第1号、1995年11月；「日本の生産性向上運動・試論——〈訪米〉の意味」『国学院経済学』第37巻第2号、1989年11月など。  
ecojk@kokugakuin.ac.jp

<sup>1)</sup> 森杲『アメリカ職人の仕事史：マス・プロダクションへの軌跡』中公新書、1996年。

<sup>2)</sup> 拙著「イギリス機械工業における技能養成と労使関係——1920年から1950年まで」『（大阪市立大学）経済学雑誌』第78巻第1号、1978年1月。

ら15年。他ならぬ森さんから拙著にたいして長文の書評をいただきました。マサチューセッツ州ウースターこそ「[技能養成と労使関係]という研究テーマのもとで最初に取り上げる」のに適切であったと評価していただき、そのうえ、「綿密な研究」によって『「世界区」で選ばれうる書物としての質を達成した』と、過分のお褒めにあずかりました〔森：1〕。

とはいえ、書評のなかの具体的なコメントに答えるのは、なかなか大変でした。せっかくリプライの機会をいただいたにも拘らず、本誌の第二号には書けなくて、編集者から催促に催促をいただいた挙句、こういう手紙のようなリプライになってしまいました。申し訳なく思います<sup>3)</sup>。

あらかじめ引用のスタイルを示しておきます。簡略化のために、森さんの書評については〔森：xxx〕とし、拙著の該当箇所は〔木下：xxx〕あるいは〔第xx章〕としました。その他の文献は脚注に示しました。

### 3

森さんはこう書きます。

「著者がウースターの事例にそくして書きそれをアメリカ全体の一般的趨勢としていくことの妥当性を、少しくフィラデルフィアの事例との比較によって検証してみよう」〔森：2〕

そうですね、たしかに拙著は「ウースターの事例」を「アメリカ全体の一般的趨勢」として書いたようにも読めるのでしょうか。とりわけ、タイトルを『アメリカ技能養成と労資関係』と

してしまいましたから、そう読まれてしまったことに対して、弁解の余地はありません。

ちなみに英語のタイトルは、

*From Mechanic to Manpower: a History of Apprenticeship in Worcester, Massachusetts, 1841-1915*

です。「マサチューセッツ州ウースターにおける徒弟制度の歴史」と題しておけば、そのように理解されることはなかったはずです。

ところが、拙著はたんなる地方史でも、徒弟制度の歴史でもないのです。このウースターという東北の片隅にある工業都市が、他の都市と同様、巨大企業の登場をはじめとする一九世紀末からの変化を受けたその姿を描いたのです。それはとりわけ、電気の時代という形でやってきます。技術教育においても、電気技術者・教育者に主導された工学教育という形でやってきました〔とくに第5章メンデンホール改革〕。

ですから、ヴェクトルは逆なのです。ウースターの事例を「アメリカ全体の一般的趨勢としている」のではなく、「アメリカ全体の一般的趨勢」を、ウースターという地域（locality）において捉えようとしたのです。そのために章別編成を、ウースター市、マサチューセッツ州、合衆国というふうに同心円状に構成しました〔木下：11（図序－1 本書の構成）〕。

この点については、序章において、「本書はマサチューセッツ州ウースターを中心とした技能養成と労資関係の歴史を考察しようとした。いってみれば、合衆国の技能養成と労資関係の転換を、東北端の工業都市を軸に描き出そうというわけである」〔木下：6〕と要約したとおりです。

その意味で、拙著のウースター研究は、このあと、いくつかの代表的な都市においてそれぞれの「工業都市を軸に描き出」した研究がおこなわれ、それら事例研究の積み重ねのなかで、ようやく評価が定まるのであろうと考えていま

<sup>3)</sup>私の知るかぎり、他に次の書評・紹介が刊行されています。樋口映美、『アメリカ学会会報』139, 2000年；上野継義、『社会経済史学』66-6, 2000年；関口定一、『日本労働研究雑誌』491, 2001年；平沼高、『産業教育学研究』31-1, 2001年；熊沢透, 社会政策学会編『グローバル化と社会政策』（法律文化社, 2002年）。本稿ではこれらの書評に対するリプライを直接にはおこないませんでした。

す<sup>4)</sup>。

#### 4

これは憶測なのですが、森さんはフィラデルフィアにあるペンシルベニア大学に留学された時に、この書評を着想ないし準備されていたのではないかと思います。というのも、1994年に拙著の草稿をお渡ししているはずだからです。この年の夏、拙著などを取り上げた経営史学会のワークショップが開かれ、東條由紀彦さんをコメンテーターにして、森さん、上野継義さん、そしてコーディネートしていただいた高田聡さんらが、親身になってコメントやアドバイスをしてくれました。その時の参加者の全員に初期草稿を手渡したのです。回収することはありませんでした。上野さんは拙著にたいする書評のなかで、これを「1994年草稿」と呼んでその内容を紹介され、それ以後の私の改定作業を紹介されています。

こういう事情なので、おそらく森さんは少なくとも私の初期草稿を読まれたうえでフィラデルフィアに赴かれたのではないかと思います。そこではウォルター・リクトのもとで研究生活を送られたと聞いています。言うまでもなくリクトには、フィラデルフィアにおける職業教育の歴史を取り上げた *Getting Work*<sup>5)</sup> という著書があります。

森さんの書評は、ウースター研究としての拙著を「フィラデルフィアの事例との比較によって検証」という形をとっています。その背景には以上のような事情があったものと思われる。

拙著は、アメリカにおいても類書のない、孤

独な存在でした。そこに、枚数に限りある書評という形ではあれ、他ならぬ森杲によるフィラデルフィアの事例にもとづいたコメントが寄せられた。野幌での適切な導きにひき続いて、また有難いお引き立てをいただきました。

#### 5

書評には多くの論点が含まれています。ここでは、それらをひとつひとつ取り上げるのではなく、いくつかを集約して、お答えしたいと思います。

じつは、さきほどの〈アメリカ一般の趨勢〉が論点の第一番目でした。その他にあと四つあります。それぞれ〈政策過程と制度〉、〈巨大企業と産業集積〉、〈フィラデルフィアとウースター〉、〈ペンシルベニアとニューイングランド〉と名づけておきましょう。

それでは、第二の論点である〈政策過程と制度〉に移ります。これは「それぞれの主体が実現しようとしたさまざまな可能性の虹 (spectrum) と、結局のところ実現されて制度となったもの」と言い換えることができます。

書評が正しく指摘しているように、拙著のテーマは「いろんな種類の職業教育の生誕を紹介することではない」[森：4]。そうではなく、機械工国際組合がニューイングランド地方に対して組織化攻勢を開始するという客観情勢を背景として、「使用者と労働者の利害と目的の違い」[森：4] に沿って、異なる技能養成の制度が考案され、それらをめぐって複雑な対抗関係が展開したというところにあるのです。教育史という言い方を敢えて用いれば、教育制度史ではなく、教育政策史なのです<sup>6)</sup>。

<sup>4)</sup> もっとも、拙著を英語に翻訳していませんから、現実には合衆国における研究は本書を無視して進んでゆくことになるでしょう。

<sup>5)</sup> Walter Licht, *Getting Work: Philadelphia, 1840-1950* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1992)

<sup>6)</sup> 教育政策史という場合、海老原治善『現代日本教育政策史』(三一書房, 1965年)やブライアン・サイモン、成田克矢訳『教育と労働運動』(亜紀書房, 1980年)などを念頭に置いています。研究歴の初期の段階で、これらの書物から深い影響を受けました。これを労使関係の草の根にまで降りて考察し直すことが、修士課程以来の私の目標でした。

書評には、ウースターのトレイド・スクールやフィッチバーグの高校連携教育やゼネラル・エレクトリック社リン工場の新徒弟制などの

「教育内容がどのようなもので、どの程度の労働者が教育を受け、それが現場でどれだけ役に立ったのか。職業教育が徒弟制への「準備」か「補完」か「代替」かにかかわる議論をやった結果選ばれた現実の教育は、その選択によって企業に多少とも異なる効果を及ぼしたのかどうか。そういうことの検証がなく、どのような論争があったかしかわれわれは知ることができないので、対立が本当のところどれだけ深刻なものだったかがわからない。」[森：12]

と書かれています。おそらく森さんが関心を持っておられるのは、次の世代の労働力がどのような制度によって養成されるか、ということなのでしょう。言い換えれば、「結果がどうだったのか」ということです。それに対して私が立てた問いは、そのような結果は、労資のどのような対抗関係のなかから現われたのだろうかというものです。この問いを、ウースターとフィッチバーグを中心に微細に検討することが、第Ⅲ部の課題でした。つまり政策決定過程が問題だったのです。そしてその過程を、審議会のような政策決定機関のレベルにとどめずに、いわば万人の万人に対する闘争の場である市民社会の実態にまで降りていって考察したわけです。

現場がどのように変わったのかが重要ではないというわけではありません。しかし、拙著の第Ⅲ部の目的はそのような「可能性の虹」を描き出すことでした。闘争のなかで破れ去った路線も含めて、もの言わぬ人々の闘いを掘り起こすことを、課題としたのです<sup>7)</sup>。

<sup>7)</sup>もうひとつの理由として、史料が見つからなかったという事情があります。ウースターにしてもフィッチバーグにしても、生産現場についての史料に到達することができませんでした。ある程度の史料があれば、研究経路（research trail）を変更して生産過程と技能養成の研究に乗り出したかもしれません。

まず、マサチューセッツ州においては、「当時の開明的、妥協的、攻撃的な使用者がそれぞれ別の立場から異なる制度を求めたというような整理」[森：12-13]は可能だと考えます。これはフィッチバーグにおける1907年の機械工ストライキが、まさに技能養成のあり方をめぐるストライキであったことを実証したことで、果たされたと思います。それは、書評の言葉を用いれば、「開明的」技能養成制度と「攻撃的」制度との選択をめぐる対立でした。そして、フィッチバーグの機械工たちが生活をかけて護ろうとした「開明的」技能養成制度は、ストライキに敗れることによって、ついに実現に至りませんでした[第10章フィッチバーグ・プラン]。

そして、その労資入り乱れての合従連衡の帰趨が、マサチューセッツ州のダグラス委員会と、その後継機関であるヘイナス委員会の、それぞれの委員の選定および審議の過程に大きな影響を与えたことも実証したつもりです<sup>8)</sup>。たとえば男同士で根回しをして労働組合派の女性代表を排除するなどという行動を「深刻な対立」と言わずして、何と表現すればよいのでしょうか[木下：313-317]。

とはいえ、「労資関係の展開が職業教育運動に「決定的な意味」をもった」と書いたのが誇張であるという批判は、率直に受け入れるべきかもしれません。この点は、マサチューセッツ州の職業教育における「攻撃的な」使用者たちが全国的な影響力をもったかどうか、という点に関わります。森さんの書かれているとおり、

「こうした[職業教育改革の全国的な]議論で全体の動きをリードしたのは社会改良家の、とくに学校改革に熱心に取り組んだ人々」[森：11]

でした。そのことは拙著の第Ⅲ部にも書き込ん

<sup>8)</sup>親労働派の選出については拙著225～228頁、オープンショップ派の選出については313～317頁。

だとおりです。全国的な展開がそうでしたし、マサチューセッツ州における展開もある程度そうでした。拙著が明らかにしたのは、この通説を踏まえたうえで、全国的な職業教育運動を推進した団体NSPIEは、マサチューセッツ州の機械工業におけるオープンショップ使用者たちによって結成されたということ、そしてその中心に「トレイド・スクールの父」ミルトン・ヒギンズとゼネラル・エレクトリック社リン工場の「新徒弟制」創設者マグナス・アレグザンダーがいたということです〔第12章産業教育促進全国協会〕。

ここでも、政策決定過程におけるさまざまな利害の対立関係を重視するのか、それとももっぱら結果として生じた制度に注目するのかという視点の相違があるように思われます。

拙著はこのような形で、「ウースターのなかに一般的趨勢を入れた」つもりなのです。そして、一般的趨勢のなかにウースターさらにはマサチューセッツ州のオープンショップ使用者の行動を投げ入れて、位置づけ、それを「決定的な影響」と評価したのです<sup>9)</sup>。

## 6

次に第三の論点〈巨大企業と産業集積〉に移りましょう。森さんは、

「〔拙著〕 中小の専門生産企業の時代から大企業の大量生産体制に統括される時代に転換したという「常識」を背後に置いているのではないか。世紀転換期の技能養成の課題には、そうした図式の外で考えなければならぬことが少なくない。」〔森：8〕

<sup>9)</sup> この論点に関して大事なのは、「労働史からこれほどに強い線引きをしてしまうのは、双方の研究者の有益な対話を閉ざしてしまうことにならないだろうか」という一節です。この点は、よくよく考えねばならぬことだと思います。とりあえず教育史の研究者に対して言いたいのは、拙著の第Ⅲ部が全体としてチャールズ・ベネット『職業教育史』に対する批判であるということです。これについては第13章注50(410-411頁)をご覧ください。

と書いておられます。後半のパラグラフにはまったく賛成です。ただ、問題は、拙著が19/20世紀転換期のアメリカ技能養成についての通史ではない、という点にあります。(ここでも、拙著のタイトルが誇張だという批判があれば、それを受け入れねばなりません。)

前半についていうと、ここでも「ウースターに一般的趨勢を持ち込む」という意図が貫かれています。中小の専門生産企業が集積していたウースターに、巨大企業成立の嵐が吹き込んできました。そのひとつが、メカニック教育に対抗して登場した大学(学部)レベルでの工学教育です。拙著は、メカニック教育が、その生誕の地ウースターにおいて、工学教育に取って代わられた過程を考察しました〔第5章メンデンホール改革〕。言い換えれば、ウースターですら、電気機械工業に代表される巨大企業成立過程の影響を免れなかったのです。

この点を実証するために、拙著の第Ⅱ部は、巨大企業の台頭にともなう工学教育の形成過程を考察したのです。その意味で、書評のなかの、「世紀転換期にメカニック教育が「解体」し、それに代って台頭した工学教育が生産現場を支配するにいたるという論旨に、私は賛同しがたい」〔森：7〕

という箇所は、理解できません。メカニック教育も工学教育も、ともに大学レベルでの技術者養成のための教育ですから、「生産現場を支配する」という表現はもともと妥当しないと思います。むしろ「技術者教育を支配する」というべきではないでしょうか<sup>10)</sup>。もう少し言えば、工学教育によって育てられた技術者が「生産現

<sup>10)</sup> 念のため拙著の定義を引用しておきます。メカニック教育とは「技術者養成機関のカリキュラムのなかに徒弟修業を組み込んだもの」〔木下：96〕を指します。これに対して「工学教育は、メカニック教育とは反対に、“技術者は機械工とは質的に異なる階層である”との考えに立つもの」であり、「徒弟制を経ることなく、つまり労働現場における経験を積むことなく、生産についての理論的知識を蓄えてゆく」〔木下：119; 121表5-1〕やり方です。



場を支配」できなかったからこそ、ハーマン・シュナイダーによる大学レベルの連携教育「シンシナティ・プラン」が脚光を浴びたのです〔木下：188－198〕。

ここまで来て、＜産業集積と巨大企業＞というテーマを取り上げることができます。ウースターの製造業者の多くは工学教育を嫌悪しました。おそらくフィラデルフィアの製造業者もそうでしょう。その意味で19／20世紀転換期には、「雑多な産業群の成長のなかでメカニック教育が工学教育にとって代られうる産業分野は、きわめて限られていた」〔森：6〕という評価も、事の一面をついています。ただ、私が描いたのは、「産業全般に製品の型、品質、生産工程などの大幅な標準化が進展し、科学的管理が人事管理と融合して工場に位置づくのは、第1次大戦以後のことだった」〔森：7〕というような、全体像についてのスタティックな図柄ではなく、古いものを乗り越えて新しい図柄へと変えてしまう、工学教育という技術者教育の台頭の過程なのです。つまり新しい事態がどのように胚胎したのかという発生史的な分析なのです<sup>11)</sup>。

## 7

第四の論点＜フィラデルフィアとウースター＞に移ります。トレイド・スクールというのは、従来の徒弟制に代わって、いわば工業高校の教育課程をつうじて熟練労働者を養成しようとするものです。これに関して、森さんはこう書いています。

「〔問題は〕職業教育の制度を普通教育から切り離すか否かだった。切り離す方への賛成が産業界に強かったのは事実だが、その熱意のほどは、どうも本書の著者が書いて

ているようには強くなかったと思われる。産業の中でもオープン・ショップ経営者がとくに労働組合によって規制される徒弟制に代るものとしてトレイド・スクールに期待したというのが著者の解釈であるが、それならフィラデルフィアの機械工業界などをもっと熱烈にトレイド・スクールの設立で結束したはずである。」〔森：10〕

ここでもウースターの事例を「アメリカ全体の一般的趨勢としている」と解釈されたうえでコメントされていますが、それは措きます。

なぜフィラデルフィアの機械製造業者がトレイド・スクールに熱心でなかったかは、フィラデルフィアに即して本書と同様の歴史研究をおこなった後ではじめて答えられる質問です。つまり挙証責任は「フィラデルフィア」のほうにある。でも、それはそれとして、敢えてウースター研究の経験から憶測を逞しくしますと、二つの背景（作業仮説）が考えられます。

ひとつは機械工国際組合の影響力あるいは機械工の団結力がウースターよりも強かったということ。ウースターに即していうと、鉄道つまり機関庫を除いては、この組合の組織化運動は相次いで敗退しました。そしてそのあとに登場した支部リーダーは製造業者のヘゲモニーを受け入れました〔木下：283－292〕。

もうひとつの理由として、ニューイングランドにおけるメカニックの伝統を挙げることができます。この点を明らかにするために、拙著は第Ⅰ部を設け、メカニックの教育をめぐる対抗関係を考察しました。フィラデルフィアの製造業者であるコールマン・セラーズは、これを遠くから羨ましく見ていました〔木下：114〕。

さて、トレイド・スクールによって新規に熟練労働力を養成することをしなかったフィラデルフィアの製造業者は、その代わりに、「出来合いの熟練労働者を誘引することに情熱を注いだ」。

<sup>11)</sup> フィラデルフィアについてスクラントンらがおこなったように、ウースターの産業集積を分析する作業は重要だと思います。有意義な史料を見つけられなかったことと、基本テーマにとって不可欠ではなかったので、拙著ではそのようなアプローチを取らなかったというにすぎません。

「たとえば同地の金属製造業者協会に企業を結び付けたいちばんの接着剤は、この協会の労働局（ビューロー）が毎年、何千人もの鋳型工と機械工を見つけて彼らの経験や資格とともに会員企業に無料紹介したところにあった。この協会の活動はほとんどそれだけに終始したとさえいえる。」[森：14]

フィラデルフィアにおけるレイバー・ビューローの事例は、すでにハウエル・ハリスが名著 *Bloodless Victories* をつうじて明らかにしたところ<sup>12)</sup> だが、この職業紹介機関についても、ウースターが先輩格であったことは拙著に記したとおりです [木下：255-256；271-276]。まとめにあたる文章を引用しておきます。

「こうして、レイバー・ビューローをつうじて労働需要をコントロールしていた機械製造業者は、こんどは労働供給までも支配下に置いて、機械工の地域労働市場を完璧に統括してしまうかのようである。私設の職業紹介所をとおすことによって活動家や組合員や規律に従わぬ機械工を排除し、そのかわりに、労働組合や労働運動の何たるかを知らないが熟練は「一人前」であるトレイド・スクール卒業生を雇い入れれば、「健全」な労働力を再生産することができるにちがいない。」[木下：281]

つまりウースターの製造業者は、レイバー・ビューローを前提したうえで、それを補完する労働組合排除策として、トレイド・スクールを設立したわけです。

そのような積極的な組合潰しを試みられるだけの条件があったということが、ウースターの機械工業の歴史的個性でした。フィラデルフィアのオープンショップ製造業者は指を咥えて見

ているしかなかった。とすれば、次に疑問が浮かぶのは、このオープンショップ都市ウースターが、事例としてどのような意味をもつかということでしょう。

## 8

ここにきて、第五の論点〈ペンシルベニアとニューイングランド〉が浮かび上がります。

アメリカ史研究の、とくに植民地時代からアメリカ革命までについての研究史において、いったいどこが「アメリカ」の起点なのかという問いが、通奏低音のように響いています。起点だと主張されているのは、ニューイングランド、ペンシルベニア、メリーランド／バージニア、あるいはカリブ海と、研究者によってじつに様々です。

このなかで、ニューイングランド（の特定の地域）を研究するのは、どのような意義があるでしょう。私はニューイングランド研究の意義を、合衆国の「国民性」論を吟味することにあると考えています。国民性論とは、たとえば最近刊行された著書のなかの次のような文章に典型的に現われています。

「たいていの国には中核あるいは主流となる文化があり、それは社会のほとんどの人によって多かれ少なかれ共有されている。この国民的な文化のほかに、通常はそれに付随する文化が存在する。」

そうして、

「アメリカ人のアイデンティティの中核にあるのは入植者がつくりだした文化であり、それは何世代もの移民によって吸収され、アメリカの信条を生みだしたものののである。その文化の中心はプロテスタンティズムだった。」

だから、

「アメリカの起源は、「イングランドの清教徒革命に見出せる。実は、その革命こそ

<sup>12)</sup> Howell John Harris, *Bloodless Victories: The Rise and Fall of the Open Shop in the Philadelphia Metal Trades, 1890-1940* (Cambridge University Press, 2000)

がアメリカの政治史のなかで国を形成することになった唯一かつ最も重要な出来事なのである」。アメリカでは……「すべてがプロテスタントに端を発していた」。

アメリカはプロテスタントの国として築かれたのであり、それは二十世紀にパキスタンとイスラエルが、それぞれイスラム教徒とユダヤ教徒の社会としてつくられたのと同じような理由によることだった。」

引用が長くなりました。これらはすべて、サミュエル・ハンチントンの近著『我々は何者なのか？』からの引用です<sup>13)</sup>。

アメリカ外交政策の主要な知的源泉のひとつであるハーバード大学政治学部の重鎮にして、冷戦後の世界を「予言」したと言われる『文明の衝突』の著者、そのハンチントンにとってアメリカ文明は、プロテスタンティズムを核心とするものでした。

これが例えばルイス・ハーツでしたら、ロックの哲学や啓蒙思想に重点を置き、したがってペンシルベニアなどに焦点があてられるように思われます。それに対してハンチントンは、マサチューセッツを典型と考えるのです<sup>14)</sup>。

話をもう少し経済史に近づけましょう。ハンチントンはこんなことも書いています。

「アメリカの植民地のあいだで清教徒の思想と生き方が浸透したのは、一部にはイーストアングリシアからの入植者にきわだった特徴があったためだった。……イーストアングリシアからきた人びとは、農民よりも都市部の職人が圧倒的に多く、そのほとんど

が家族単位でやってきた。ほぼ全員、読み書きができた。ケンブリッジで学んだ人も大勢いた。彼らはまた宗教心が篤く、神の言葉を広めることに熱意を燃やしていた。彼らの思想と価値観および文化は新しい土地一帯に広まり、とりわけ中西部の「グレーター・ニューイングランド」に普及し、新しい国の生活様式と政治の発展に決定的な影響をおよぼした<sup>15)</sup>。」

つまりマサチューセッツのメカニックは、イーストアングリシアのヨーマンの伝統を継承し、ピューリタン革命の経験を踏まえ、ニューイングランド植民地を発展させた人びとの末裔なのです。拙著は、トレイド・スクール成立史とも読めますが、その歴史は、たんなる技能養成ないし職業教育の歴史ではなく、メカニックの原像を1841年設立のメカニック協会とその精神的支柱であったエリヒュー・ブリットに求めたうえで、それに対抗しつつ、敬虔かつ能動的な労働者を養成しようとするWASP製造業者たちの試行錯誤の歴史であったことを明らかにしたつもりです [第Ⅰ部]。それを踏まえたうえで、メカニック教育の解体にともなうマンパワーの台頭<sup>16)</sup>を論じ [第Ⅱ部]、この新しいヘゲモニーに対する労働者の闘いと職業教育にあらわれたその帰趨とを描き出しました [第Ⅲ部]。

## 9

拙著を最も深く理解しているであろう数人の友人のうち二人から、同じことを言われました。ひとりは、「君の本が理解されるまでには三十年かかるだろう」。もうひとりは「君の仕事を

<sup>13)</sup> ハンチントン『分断されるアメリカ』（集英社、2004年）、92、96、97頁。

<sup>14)</sup> 日本人で、長期のアメリカ留学経験のある知識人のなかでは、たとえば鶴見俊輔さんがマサチューセッツを方法的な軸として合衆国を理解されていると思われまゝ。ただし、「マサチューセッツ」あるいは「ニューイングランド」はアメリカが日本に対して仕掛けた罠であるから、それを相対化する努力が大事だと、鶴見さんは考えてこられたのです。『鶴見俊輔集』全12巻（筑摩書房、1991—92年）。

<sup>15)</sup> ハンチントン『分断されるアメリカ』、100頁。

<sup>16)</sup> ささまざまな書評のなかで、最も根本的な批判と思われるのは、「そもそも「マンパワー」は具体的な史実によって漸次構成される歴史的概念なのだが、時にその概念が独り歩きし、意味がつかみきれないところがある」という上野さんの一節でした。関口さんも同じ問題点を別の表現で指摘しておられます。この問題点の克服を、拙著に続く研究プロジェクトの中心課題にします。



受け継ぐ研究者が出るまでには百年待たねばならないだろう」と。

たしかに私自身、妙な本を書いてしまったと自覚しています。「はしがき」に告白したように、本書は「松永〔安左エ門〕や日本国政府が青少年に与えた価値意識を額面通り受け取って内面化し、能動的主体として生きようとした」十代の自分自身——1960年代の私——に対して「マンパワーという名前を与え、そのルーツを辿ってみよう」とした作品です<sup>17)</sup>。合衆国において「マンパワー」という20世紀の人間類型を塑像しつつあった人々の社会的性格を、19世紀の人間類型であったメカニクの伝統のもっとも強かったマサチューセッツ州ウースターという典型的なニューイングランドの工業都市において、捉えようとした。そのための検出装置が、ウースターのトレイド・スクールであり、フィッチバーグの高校連携教育であり、そして両者に共通するモデルとなったゼネラル・エレクトリック社リン工場の企業内徒弟教育でした。このような錯綜した世界を、「マンパワーの発生についての重層的な物語<sup>18)</sup>」として書くことが、課題でした。

その意味で、どれかの専門分野（フィールド）に沿ったかたちでまとめるのは不可能でした。いや、“牧草地なんぞは牛にくれてやれ（Field

is for cows<sup>19)</sup>）”という気持ちで、分野を問わず適切と思われる先行研究を定め、必要ならばそれを批判しつつ、収集した一次史料に矛盾しないような枠組みを構築して、本書をまとめました<sup>20)</sup>。

森さんは拙著を労働史に位置づけてくださいましたが、現地を訪れて探索しても——エリヒュー・ブリットの日記などを例外として——労働者が主体（主語）となった史料にほとんど行き当たらなかったのも、おそらくこの分類には有力な異論が出ることでしょう。また第Ⅱ部は明らかに経営史に属します。そして第Ⅲ部は、どう見ても教育史（教育政策史）にはみ出しています。経済史は……などと聞かないでください。脚注などでそれぞれの分野の研究者にメッセージを送る努力をしたつもりでしたが、それも十分ではなかったということは、書評などから明らかです。

このような拙著の成り立ちからして、読み物（narrative）としてはともかく、いざそれぞれの学会に対する貢献を評価しようとする、じつに論じにくい本となってしまいました。

扱いにくい性格を何重にももつ拙著を、あえて取り上げ、書評にまとめてくださった、森さんをはじめ諸先生に末尾ながらお礼を申し上げます。

<sup>17)</sup> その意味で、1960年代日本のマンパワー政策についての歴史研究が書かれなければなりません。その場合には、職業教育と企業内教育とを統一した枠組みが必要でしょうし、また国際的な契機、おそらくイギリスおよびアメリカ合衆国の影響を、充分に考慮に入れねばならないでしょう。

<sup>18)</sup> 「重層的な物語」という言葉は、村上春樹『アンダーグラウンド』にたいする佐野真一の書評から取りました。「我々は固有の物語を、オウム信者たちが麻原彰晃に自分の物語を積極的に委ねたのと同様、誰かに譲り渡して日常生活を送ってはいないだろうか。そしてそのことが、「こちら側」の物語を「あちら側」の物語と張りあわせ、そして凌駕する方法を閉ざすことにつながってはいないだろうか。／……このインタビュー集を貫いているのは、重層的な物語をもつことによってしかこの世界で個であることの孤独を癒せないとの信念をもって小説に専念してきた著者の、そうした思いである。」『文学界』1997年6月号、262頁。

<sup>19)</sup> 又聞きなのですが、アンソニー・ギディンズの言葉だそうです。

<sup>20)</sup> 本書を読みにくくしている背景のひとつは、先行研究として定めた書物のほとんどが翻訳されていないことでした。先行研究の内容を要約すると物語りの流れが断ち切られるのを恐れて、多くの章において、研究史の検討を「はしがき」ではなく、「あとがき」や「脚注」に下ろしました。これによって、よりいっそう評価に難渋する書物になってしまったのだと思われます。これも反省すべき点です。